

『お隣さんは過保護な王子様』

著：若月京子

ill：明神 翼

★★★

野間玲史は十八歳。第一志望の大学に受かり、大きな希望とそれ以上に大きな不安を抱いているところだった。

実は玲史は、高校生活をまともに送っていない。

高校入学してすぐに交通事故に遭い、入院生活となってしまったため、ようやく高校に通えるようになったときには、もうクラスの間人間関係ができあがっていたのである。

おまけにバレエ部の期待の次期エースでクラスでも人気者の尾形が、おかしな感じで絡んできた。

真っ黒な髪と目を持ち、肌の色が白い玲史はおとなしく見られがちで、尾形も最初からどこか偉そうな態度だった。

明るく話しやすく、誰にでもフレンドリーなイケメンの尾形だが、玲史は苦手だ。孤立している自分に声をかけてくれるのはありがたかったが、その構い方にどうにも性的なものを感じて苦手だったのである。

中学生の頃からその手の若い男や中年男性に声をかけられていた玲史は男の下心に敏感で、それゆえに尾形と距離を取ろうと苦心する。

しかし尾形はしつこく絡み、そのせいで余計他のクラスメイトから孤立する結果になった。しかも途中からは本当に性的な接触を含むようになり、校舎内で襲われそうになったことから怖くなって不登校になってしまった。

原因が原因なので両親にも説明できず、事故のブランクでうまくクラスに馴染めないとしか言えなかった。

姉にだけは本当のことを打ち明けたおかげで口添えをしてもらえ、登校しろと無理強いされずに過ごさせてもらうことができたのである。

結局高校は退学して家にいることになったが、もともと真面目な性格だから生活が荒れることもなく、申し訳なさから率先して家事をこなし続けたため、今ではプロ並みの手際だ。

両親ともにとても忙しい大学病院の勤務医なので、疲れて帰ってきたときに綺麗な部屋と美味しい食事が待っているのは嬉しかったらしい。

玲史が早寝早起きの規則的な生活を送り、買い物のために外にも出かけるし、大検を取るための地道な努力をしていたから、両親も途中から心配するような言葉は言わなくなった。

晴れて大学に合格した今は、今度こそがんばろうと気合が入っている。

入学式を一週間後に控え、大学でもらった要項を何度も読み返していると、ピンポンとインターホンが鳴る。マンションの入り口ではなく、玄関のほうのインターホンの音だ。

なんだろうと思いながらインターホンに出てみると、隣の部屋の人が引っ越しの挨拶に来たとのことだった。

「はい、ちょっとお待ちください」

玲史はインターホンを切ると急いで玄関に行き、扉を開ける。

「——」

扉の前に立っていた男と目が合って、その瞬間玲史はビクリと震えた。

日本人にはない銀色にも見えるグレーの瞳に、青い色が見える。怖いほど綺麗なその色に魅せられ、鋭く射抜くように見つめられ、妙に怯えてしまったのである。

しかし男の目はすぐに優しいものになり、自己紹介をした。

「どうも、こんにちは。隣に越してきた佐木龍一です。これからどうぞよろしくお願ひします。これ、どうぞ」

にっこり笑って有名菓子店の箱を差し出してきた青年は金色が混じった明るい茶色の髪で、肌色も顔立ちも日本人離れしている。

イケメンやハンサムと言うより美形と言うほうがふさわしい、素晴らしく整った男らしくも美しい顔立ちである。

おまけに玲史より二十センチくらいは長身で、体格もいい。笑顔で挨拶をしてくれたからよかったが、ちょっと後ずさりたくなるような迫力の持ち主だった。

そういえば先日引っ越ししていった隣の若夫婦は、奥さんのほうが「代わりに弟が入りますので、よろしく」と言っていた。

綺麗で上品な彼女も綺麗なグレーの瞳の持ち主で、ハーフだと言っていた。

「ええっと...こちらこそ、よろしくお願ひします。ここのお菓子、美味しいですよ。ありがとうございます」

います」

「親に持たされたんですよ。俺は一人暮らしをするのは初めてなので、いろいろ教えてもらえると嬉しいです。特にこの街のこと...スーパーとか、旨い店とか」

「あ、はい。いいですよ」

「本当に？ 本気をお願いします。何しろ炊飯器の使い方しか教えてもらっていないから、今夜から早速何か買ってこないと」

「ええっ!? 炊飯器の使い方だけ？ じゃあ、味噌汁とかおかずは？」

「味噌汁はお湯を注ぐだけがあるらしいし、おかずは最初のうちはスーパーとか惣菜店で買ってくればいいかと思って。慣れてきたら、目玉焼きから始めてみる」

「目玉焼き.....」

それすら作ったことがないのかと、玲史は目眩を感じる。

よくそれで一人暮らしをする気になったかと、感心さえしてしまいそうだ。

「かなり、切実ですね。よければ、これから案内しますけど」

どうせ玲史は暇だし、お隣さんと仲良くしておくとか何かあったときに心強い。

「本当に？ 助かります」

「ちょっと待ってくださいね。上着を取ってきます」

「じゃあ、俺も」

いったん別れて、玲史はもらった菓子の箱をリビングのテーブルに置く。そして自室に戻ると上着を羽織り、スマホと財布をポケットに突っ込んだ。

靴を履いて外に出るとちょうど龍一も出てきたところで、連れだってエレベーターに向かう。

「あー...ところで、なんて呼べばいいのかな？」

「.....そういえば、名乗っていませんでしたね。野間玲史です。うちはみんな野間なので、玲史って呼んでください」

「俺は龍一でいいよ。年は十九歳で、大学二年になるところ」

「十八歳で、大学一年です」

「一つ下か。どこの大学？」

大学名を言うと、龍一は驚きの表情を浮かべる。

「俺と同じだ。へー、後輩か。俺は法学部だけど、玲史は？」

「同じです。すごい偶然ですね」

「本当にな。でも、ちょっとホッとした。後輩なら、俺にもいろいろ教えられることはあるから、遠慮なく頼れる。姉貴の部屋を借りて一人暮らしできるのは嬉しいけど、メシしか炊けないのはヤバイよな」

「ボクは料理得意なので、教えますよ。慣れれば簡単です」

「おお、マジでよろしく。その代わり俺は、教授のこととか、試験のコツを教えるよ」

「お願いします」

「持ちつ持たれつってことで」

「はい」

大学の先輩後輩と分かって、一気に距離が縮まった気がする。

エレベーターを降りて外に出て、駅のほうに向かって歩きながら、この店は美味しい、この店はダメと教える。

マンションと駅の間には二つのスーパーがあって、それぞれ特徴があるためにその使い分けの方法も教えた。

「生活用品は全部置いていってくれたから、問題はおかずなんだよな。やっぱり基本はスーパーと弁当屋になっちゃうか」

「テレビで見るような、元気な商店街ではないですからね。レトルトと冷凍食品もわりと美味しいですけど、ちょっとしたおかずは自分で作れないと不便じゃないかな？」

「だよなあ。いや、本当に、そのあたりよろしく」

「はい。まずは目玉焼きからですね」

「そのあと、オムレツだな。簡単な朝食メニューから教えてほしい。いちいち外に食いに行くの、面倒だし」

「分かりました。それじゃあ、パンとか卵を買って戻りますか？」

「その前にコーヒーが飲みたい。豆も買いたいし」

「コーヒー専門店があります。父のお気に入りの店で、うちはそこで豆を買っていますよ」

「それじゃ、そこに行こう」

大通りから一本入ったところにこぢんまりとしたその店があり、前を通るだけでもコーヒーのいい香りがする。

二人は空いている席に座ると、龍一が奢るからと言ってケーキセットを二つ頼んだ。

夫婦で経営している小さなこの店では、ケーキは自家製で種類のみだ。日替わりだが、とても美味しいと評判である。

「はー...旨い。姉貴のとことは、豆の好みが違ってさ。あっちは酸味好き、俺は苦味好きなんだよ」
「ああ、ボクも酸っぱい系のコーヒーはちょっと苦手です。おかげで少し安くすむから嬉しいですけど。酸味の代表のブルーマウンテンとか、高いですもんね」
「買うなら、しっかりローストしたブラジルかなー」
「あ、今のうちに言うておくと、好みの感じでローストしてもらえますよ」
「お、マジ？ ちょっと失礼」

龍一は慌てて立ち上がり、マスターのところに行って持ち帰りの豆をオーダーしている。肩ひじ張ることなく話せる龍一に、玲史はホッと吐息を漏らした。

久しぶりの学生生活ということで大きな不安もある中、龍一という頼もしい先輩ができたのは本当に嬉しかった。

「注文してきた。いいな、ここ。コーヒーだけでなくケーキも旨いし、男でも入りやすい」
ケーキ店はどうしても女性客ばかりだから、甘いもの好きな男にとっては敷居の高い場所だ。だがこの店の客は男のほうが多いので、居心地がいい。

「駅の近くに美味しいケーキ店があるから、テイクアウトすればいいですよ。コンビニのデザートも美味しいし」

大通りだけでも三つのコンビニがあるから、便利なのは間違いない。

「大学の学食って、どんな感じですか？」

「そうだなー...いくつかあるから。速さと安さ重視のとことか、オシャレなカフェテリア風とか。俺は面倒くさかって法学部の棟のに行くことが多いけど、結構旨いぞ。メニューも豊富だし」

「へー。学食のイメージだと、定食にカレー、ラーメン、ソバって感じですけど」

「高校はそんなもんだが、大学は学食自体デカいからな。そこらのファミレスよりメニューは豊富だ。ラーメンだけとっても、豚骨ベースに塩、醤油、味噌とあるぞ。他の棟のラーメンは鶏がらベースとかな」

「えっ、それ、すごいですね。棟によって違うんですか？」

「同じだと、つまらないだろ。棟ごとに違う業者が入っていて、競わせているらしい。大学だと一定数の客は見込めるし、大学側からも補助が出るから、どこもわりと安くて旨いぞ」

「それは、楽しみです。あまり美味しくないようだったら、お弁当を作っていかないとな~と思っていたので」

「他の棟もあるから、そうそう食べ飽きたりしない。おまけに期間限定で地方フェアをやったりするしな。沖縄フェアのときは、ビールが飲みたくてまいった」

学生にとって一番の関心ごとである学食事情についてあれこれ聞いてから、二番目の関心ごとである講義内容について聞く。

「一、二年のうちは、講義数が多いから大変だぞ。法学部は暗記ものが多いしな。玲史は、どうして法学部を選んだんだ？」

「ええっと...暗記は得意だし、就職に有利だと聞いたことがあるので.....。検事とか弁護士は性格的に向いていない気がするから、公務員か民間企業か...じっくり考えます」

「ああ、どっちも大変だもんな~。.....って、俺は弁護士を目指してるんだけどな」

「もう決めているんですか？ すごいですねー」

「そのあたりは、まあ、いろいろと。実際、法学部の就職率は、他よりいいぞ。法律関係を知っていると、便利だと思われるみたいだな」

「在学中に司法試験に受かると、就職率がドーンと上がるとか。.....でも、それってすごく大変ですよな？」

「ああ、すごく大変だと思う。でも、目指してるやつも多いけど。俺も来年受けるために、今からもう勉強してるぞ」

弁護士になるためには司法試験に受からないと始まらない。まだ脳みそが柔らかいうちにガンガン詰め込んでいるとの話だ。

とにかく暗記しなければいけない量が半端ではないので、若いほうが有利なのは間違いない。

「うちの教授陣は厳しい人が多いから、サボろうと考えないほうがいい」

志田教授は出席に厳しくて代返が利かず、抜き打ち試験もするとか、安井教授はレポート重視だから適当に書くと痛い目に遭うとか教えられ、玲史はスマホにそれらの情報を打ち込んでいく。

試験前には龍一の入っている剣道部で、毎年改編を重ねているという想定集も見せてくれるという。

「龍一さんって、剣道部なんですか？」

「ああ。見た目がこんなだから、似合わないと言われるけどな。子供のときからやってて、それなりに強いんだぞ」

「どちらかという、音楽とかやっていそうに見えます」

「それも、よく言われる。……そういや玲史って、どこの高校だったんだ？俺の知ってるところかな？あちこちと交流試合をやってたから、わりと詳しいんだよ」

「あー……」

玲史はためらい、ろくに通えなかった高校名を告げる。

「ああ、知ってる。剣道部はあまり強くなかったけど、まあ、進学校だったからな。一度、交流試合で行ったことがあるよ。体育館とは別に道場があるのが羨ましかったな」

「……そういえば、ありましたね」

玲史が高校に通ったのは、実質一カ月に満たない期間でしかない。足の怪我で体育も休んでいたの、施設をきちんと把握する前に不登校になってしまったのである。

玲史はどうしようか少し迷った末、龍一に打ち明けることにする。

「ええっと……実は、その……あまり高校には通ってなくて。……というか、ほとんど通っていないかも」

「そうなのか？」

「はい。高校に入学してすぐに交通事故に遭ってしまって、入院生活だったんです。そのせいでうまくクラスに馴染めなくて……。大検を取って、受験しました」

「そうか、大変だったな。それじゃ、学生生活は久しぶりなわけか。後輩でお隣さんなんだから、頼っていいぞ〜。法学部の一年も紹介するよ」

「よろしくお願いします」

「おう。俺は俺で、家事を教えてもらおうわけだから。お互い様だな」

「はい。それじゃ、買い物をして帰りましょうか。……あ、夕食、うちで一緒にいかがですか？父のリクエストで、グラタンを作るつもりなんですけど」

「おっ、いいねえ。でも、俺、かなり量を食うんだけど」

「大きい耐熱皿もあるから、大丈夫です」

「じゃあ、よろしく」

二人が会計をすませて店を出ようとしたところで、ちょうど入ってこようとした客がいる。

「あ、玲史くん。ひさしぶり〜」

たまにこの店で会う、三咲七生である。

小さい店だから相席になることもあって、話してみたら同じ年だと分かったのだ。しかも互いに家事を任されているから、意気投合した。

よく行く近所のスーパーは、チラシに載っているのよりもお得な商品が不定期で出る。どうやら数が確保できないものらしく、素晴らしくお買い得だがその場かぎりの売り切りごめんだ。

話の成り行きでその話題が出たことがあって、二人はメールアドレスを交換してお得情報をやり取りしていた。

「ちょうどよかった。スーパーの前を通ってきたら、キュウリが三本百円だったよ。あと、レタスも百円。オレ、今日は買い物する予定じゃなかったのに、思わず買っちゃった」

「うわー、安いね。これから行くから、最初に確保しないと」

「キュウリはあと二箱しかなかったから、がんばって」

「ありがと〜」

バイバイと手を振って七生と別れ、スーパーへと向かう足取りが急ぎ足になってしまう。

店頭で目立つように陳列されているキュウリは残り一箱で、レタスは二箱だ。特に個数制限はなかったから、毎日サラダを作る玲史はレタスを二個とキュウリを十二本籠に入れた。

気持ちが落ち着いたところで、龍一に棚の配置や商品の大体の値段などを説明しながらあれこれと食材を買い込んだ。

マンションに戻ると龍一が実際に料理をしているところが見たいと言ったので、下拵えの段階から見学することになる。一応は手伝うと言ったが、本当に何も知らないから子供のお手伝いレベルでしかない。

海老のワタ抜きをしてもらうときも、海老ってこんな内臓なのかと驚いていた。

「……そういえば、うちのグラタンはちょっと変則的で……。父がご飯と味噌汁がないと食べた気がしないという人だから、グラタンがおかずなんです」

「へー、珍しいな。といっても、うちの父親は日本かぶれのアメリカ人だから、グラタンなんて家を出たことないけど。和食最高、生魚、生肉、生卵を食えるなんて…と感動してたらしい。ハンバーガーやピザは、たまに食べられればいいんだと」

「へー、意外。でも、それならグラタンにご飯と味噌汁でもいいですか？」

「ああ。俺も、グラタンだけじゃ食った気がしないし」

龍一はホワイトソースの作り方にも驚いてみせ、バターと小麦粉と牛乳で本当にできるのかと信じられない様子だ。牛乳を少しずつ注ぐ係をやらせてみたら、眉間に皺を寄せ、思わず笑いたくなるほど真剣に注いでいた。

「すごいな...魔法みたいだ。俺の知ってるホワイトソースになった」

「うちはここにコンソメの粉を入れて、味を濃くするんです。おかずだから、普通よりしょっぱめにしないと」

玲史も最初はインターネットで調べたレシピどおりに作っていたが、家族の嗜好や味覚に合わせて変えていっている。

結果、マカロニなしで塩気が強めのおかずグラタンに行きついたのである。

鶏肉や海老、キノコ類だけのグラタンでは野菜が足りないと、サラダもつけて味噌汁を作れば完成である。

両親は毎日揃って夕食の時間に帰れるわけではないから、オーブンで焼くだけのグラタンは熱々の出来立てが食べられて人気だ。

しかも料理中にメールが来て、今日は二人とも夕食に間に合うよう帰ってこられるという。

玲史は四人分の食卓を整え、あとはグラタンを焼くだけの状態にした。

余った時間は、龍一にレクチャーである。一緒に洗い物をしてやり方を教え、自分にとって使い勝手のいい収納も伝えた。

そんなことをしていると、玄関のほうから声が聞こえてくる。

「ただいま」

「ただいまー」

「あ、お帰り。今日は一緒に帰ってきたんだ」

「そうなの。タイミングがよかったわ。.....あら、お客様？ いらっしやいませ」

「お邪魔してます」

龍一は姿勢よく両手を脇でピシリと揃え、きっちりと腰を屈めて頭を下げる。

「こちら、お隣に越してきた佐木龍一さん。香織さんの弟さんだって」

「ああ、はいはい。そういえば、代わりに弟さんが住むと言っていました。よろしくお願いします」

「こちらこそ、よろしくお願いします。一人暮らしは初めてなので、分からないことだらけで。玲史くんいろいろな教わりたいと思っています」

「うちの玲史は、家事マイスターですからね。私なんかよりよっぽど主婦力が上だし、玲史のお友達になってくださると嬉しいわ」

「佐木くんは、何歳なんだい？」

「十九歳です。なんと、玲史くんと同じ大学の二年なんですよ。すごい遇縁ですね」

「おお、それは頼もしい。玲史の先輩か」

「はい。しかも同じ法学部です。分かったときは、ビックリしました。玲史くんが俺に家事を教えて、俺は大学について教えるということでした」

「まあまあ、本当にすごい偶然ね。なんて幸運なのかしら。佐木さん、この子のこと、よろしくお願いしますね」

「お互い様ですから。何しろ俺は、炊飯器の使い方しか知らないんですよ。玲史くんのほうが大変な気がします」

「よかったわあ。玲史に頼もしい先輩ができて」

「本当になあ」

よかったよかったと喜ぶ両親に、龍一はホワイトソースが自分で作れるとは知らなかったレベルですからね...と笑う。

そんな三人をよそに、玲史はオーブンでグラタンを焼いている間、味噌汁の仕上げをしていた。

「佐木くん、ビールを飲まんかね、ビール。今日はお祝いだ」

「あー...一応未成年なんですけどね。一応、飲んじゃいけないことになっているんですよ。でも、嫌いじゃないんですよ。むしろ、好きなんです。旨いですよねー、ビール」

「おお、嬉しいなあ。玲史は最近の若者らしく、酒の味が苦手なんだよ。大学に行くにあたって少し飲ませてみたんだが、ジュースで割って甘くしないとダメみたいだね」

「ああ、そういう学生、増えてますよ。飲み会なんかでも、乾杯はビールっていうわけじゃないし。昔は、『とりあえずビール』っていう言葉があったんですよ？」

「私たちの世代は、今でもそうだよ。母さんも、ビールをどうだ？」

「私はワインにするわ。グラタンには、白ワインでしょ。玲史、チーズをたっぷり載せてね」

「大丈夫。お母さんのは倍にしたから。トロトロだよ〜」

「さすが、玲史。どのワインにしようかしら〜」

母はいそいそとワインセラーに向かい、父は冷蔵庫からビールを取り出している。五百ミリリットルの缶を一つと、グラスを二つ用意してテーブルについた。

「佐木くんは未成年だから、ビールを飲めとは言えないなあ。でも、まあ、私だけ飲むのも申し訳ないし、味見ということで」

そう言いながらグラスの縁までビールを注いでいく。

「味見ですね、味見。それじゃ、ちょっとだけ」
味噌汁とご飯をよそい、テーブルへと運んでいた玲史は、二人のやり取りに呆れた視線を向ける。

「飲んべの言い訳だなあ」

「気にするな」

「そうそう。ビールを旨く飲むための、儀式みたいなものかな」

そう言って三人はそれぞれのグラスを持って乾杯し、美味しそうに飲む。

「うーっ。仕事終わりの一杯は、たまらないなあ」

「やっぱり、ビールですよー。この苦味が旨いのに」

「男は単純だから。白ワインの爽やかなフルーティーさこそ最強でしょう」

アルコールを美味しいと思えない玲史は、まるで同意できない。そんなものより、表面に美味しそうな焦げ目がついているグラタンのほうが重要だった。

「できたよー。熱いから、避けて」

そう言って布巾で取っ手を持ち、それぞれの前に置く。

「おーっ、旨そう」

「今日のも完璧ねー。さすが、玲史」

玲史も自分の分を置いて席に座ると、いただきますと言って食べ始める。

「うん、旨い。ホワイトソースがなめらかだな。これ、俺も手伝ったんですよ。牛乳を注いだけですけど」

「私が作ると、どうしてもダメができちゃうのよね。せっかちだから。ああ、ワインと合う。でも、お味噌汁も美味しいわ〜」

常日頃から食べないと体がもたないと言っている両親は、かなりの健啖家だ。大いに食べ、大いに飲む。

龍一も体格に見合った胃袋の持ち主らしく、三人よりも大きな耐熱皿で作ったグラタンをパクパクと食べ進めていく。

ビールを飲みながらご飯と味噌汁もお代わりし、旨いを連発してくれた。

ついでに父が冷蔵庫の中からもう一本ビールを取り出してきて、ちょっとした宴会となったのだった。

<t-pb valign="top">

★★★

その日から、玲史と龍一の交流は頻繁になった。

龍一は付き合いが広いらしくて毎日のように出かけているらしいが、帰ってくると玲史のところに顔を出して料理を手伝っていた。

包丁はまだおっかなビックリという感じだが、ピューラーは簡単なので楽しいという。小口切りやイチョウ切りといった言葉も覚え、つたないながらも一生懸命だった。

家事を教えるだけでなく、ときには一緒に映画を見に行ったり買い物をしたりして、気心の知れた仲間になりつつある。

そうして迎えた大学の入学式は、両親が揃って出席した他に、姉も仕事を休んで来てくれた。この三年間、彼らがどんなに玲史のことを心配していたのか分かる。

大学生活は無事にスタートし、朝一から入っていた講義では早速教授に脅された。

代返は許さないし、レポートの不出来や試験の点数不足で容赦なく単位を落とすという話だ。この大学は司法試験の合格者が多いことで有名だから、やはそのぶん大変らしい。

浮かれていた室内が、ピリッと引き締まったのが分かった。

玲史のように就職に有利だからと法学部を選んだ学生も多いのだろうが、成績は優秀に越したことがない。単位不足で留年するなど、とんでもない話だった。

昼休みは龍一に、法学部の後輩を紹介するから一緒に昼食を摂ろうと誘われていた。

ノートなどを片付けてロッカーにしまい、棟の一階にある学食に入ってみると、すでにもう学生で混み合っている。

とりあえず玲史は日替わりランチを購入して、もう龍一は来ているのだろうかと思いを回してみる。

「おーい、玲史。こっち、こっち」

声のしたほうを見てみれば、龍一がいて手を振っている。

玲史がそちらに行くと、隣の席をポンポンと叩いて座るよう言った。

「剣道部の後輩の、内田と丸川だ。それでもってこちらは、野間玲史くん。俺のお隣さんで、一人暮らしのための先生なんだよ。お前たちは同じ法学部だから、仲良くやってくれ」

「はい」

「よろしく」

「こちらこそ」

互いに挨拶をし、冷めないうちにと昼食を食べながら会話する。

「お前ら、朝一から講義だったんだって？うちの教授陣、きついだろう。法学部は堅物揃いで有名だからな。本当にビシビシ単位を落とすから、気をつけろよ」

「はい。一限、二限と連チャンで脅されて、怖かったっす」

「マジ、泣きそうになりました」

玲史もそれに、うんうんと頷く。

「ああ、最初に一発かますんだよ。でも、真面目にやって卒業できれば就職はバッチリだぞ。教授陣の厳しさも、就職率のよさに繋がってるからな」

「が、がんばります」

「俺、国家公務員を目指してるから、結構必死なんですよねー」

「俺は検事です。だから、本当に必死です」

「国家公務員？検事？」

内田と丸川の言葉に、大学に入学したばかりでもうしっかりと志望先が決まっているのかと、玲史は驚いてしまう。

「昔から刑事もののドラマが好きでさ、その影響。検事も弁護士も大変な仕事だけど、弁護士は悪人も弁護しなきゃいけないから、精神的によりきついかと思って」

「ああ...うーん、なるほど.....。でも、検事を見たくないものをたくさん見なきゃいけないから、つらい気がするんだけど。殺人事件とか、現場写真でトラウマになるって聞いたことがある.....」

「ああ、俺も新聞で読んだ。でも、それを言ったら刑事事件の弁護士だって同じだろ。それに、現場で直接遺体を見る警官なんて、もっときつくないか？それに比べれば、写真なんてマジだよ」

「それもそうか.....」

「野間は？もう行きたいとこ、決まってるのか？」

「まだ、全然。公務員か、民間企業か.....それすら決めてない」

「まあ、それが普通だよな。俺たち、大学に入ったばかりだし」

「うん」

「先輩は、来年、司法試験を受けるんですよね？勉強とか、もうやっていますか？」

「ああ、時間を見て、少しずつな。うちの講義、ちゃんと聞いておけよ。司法試験を受けるつもりなら、役に立つらしいから」

「はい。居眠りで減点って言われてますしねー」

「あ、それ、マジ。減点三で、欠席扱いになる」

「き、厳しい.....」

「マジですか？それ、厳しすぎないですかね？大学生って、もっとこう...いろいろ解禁されて、楽しいものだと思ってただけだなー。文化祭に顔を見せに来てくれた先輩たちも、大学は自由で楽しいぞーって言うてたのに」

「そういうことを言うと、『キミたちは、勉学のために大学に来ているのではないかね？』って言われるぞ。正論だから、言い返せない。司法試験の合格者数は、教授たちのプライドにもかかわってくるしな」

せつかく大学生になったのに、遊ぶ暇がないと二人は嘆く。

話を聞いていると、どうやら二人は高校のときから龍一の後輩で、付属からそのまま受験勉強なしで上がってきたらしい。

「二人とも、大学でも剣道部なんだよね？部に入っていたら、ますます遊ぶ時間なんてなくなる気がするけど」

「そうだけどさー。うちの大学、そんなに厳しくないって聞いてるし。目指せ優勝...なんていうレベルじゃないからなあ。佐木先輩くらいですよ、全国を狙えるの」

「あー...団体戦は無理かな。都大会を突破するのが、厳しいんだよ。毎年、いい線まではいくんだけどな」

東京は大学の数が多いから、そのぶん層も厚くなる。団体戦は一人二人強い選手がいても勝ち残れないので、部全体の底上げをしなければならなかった。

「いや、でも、あんまり高い目標を掲げられて、毎日朝練とか言われても困るので、ほどほどがいいです」

「だよなー。剣道は好きだけど、バイトもしたいし。毎日練習があると、他に何もできなくなるもんなん」

熱血とは程遠い二人に、龍一は笑っている。

体育会系だから上下関係はしっかりしているようだが、和気藹々とした雰囲気だった。

「野間も剣道部に入れば？初心者歓迎だぞ」

「んー...昔、事故でちょっと膝を痛めたから、運動部はやめておく。ちゃんと完治してるし、後遺症があるわけじゃないんだけど、走り込みとか筋トレは自信ないから」

「そうなのかー、残念。でも、一回見学に来いよ。佐木先輩目当てで、わさわさ女の子がいるから。華

やかだぞー」

「ああ、龍一さん、女の子にモテそうだもんね」

一九センチの長身に、金茶色の髪とグレーの瞳のハーフだ。体格もいいし、文句なしの色男なのに、剣道も全国大会で優勝を狙えるほどの腕前らしい。

入学式前のサークル紹介の時点で二十数人の女の子が入部し、それは続々と増えているとのことだった。

「ハードな基礎トレをさせて、この一週間で半分に減らす予定だ。二週間後には三分の一残っているかどうかだな」

「えーっ。せっかく華やかなのに。女っ気のない高校生活だったから、辞めさせるなんてもったいないですよ」

「今のままじゃ、人数が多すぎて練習にならない。うるさいしな。初心者は歓迎でも、男目当ての女は歓迎できないんだよ」

「それは、モテるから言えるセリフですよー」

「黙ってても女の子が寄ってくる男の余裕……」

二人は恨めしそうに龍一を見据える。

龍一は、フンツと鼻で笑った。

「俺は、ハンター系の女は好きじゃないんだよ。なのに、周りをそんな女で固められてみる。うんざりさせられるに決まってる」

「羨ましいとしか言えません」

「俺も、ハンターに囲まれてみたいです。先輩に言い寄る女って、自分に自信があるタイプだけあって、美人だったり可愛かったりする子ばかりじゃないですか。いいな〜」

心の底から羨ましいと言う彼らに、龍一は呆れた視線を向ける。

「お前ら、そんなだどろくでもない女に引っかかることになるぞ。ハンターの中には、男を金蔓としか見ない女もいるんだからな。ねだられるままバッグやらアクセサリーやらを買い、借金を背負って退学していったやつもいるんだぞ」

「えーっ。俺たち、貢ぐような金、持ってないですもん」

「だから、借金まみれになったんだろ。言っておくが、退学したやつはごく普通の金銭感覚の持ち主だったらしいぞ。女が遥かに上手だったんだよ。俺の経験から言うと、自分に自信のある女は面倒くさいの一言だ」

「……一度くらい、面倒な目に遭ってみたいような……」

「だよなー。さすがに借金と退学は勘弁だけど、悪い女に振り回されるのも一度くらいなら経験してみたいというか……。野間もそう思わないか？」

「え？ うーん…いや、ちょっと無理。大学の勉強だけでも大変そうなのに、女の子に振り回される余裕なんてないよ。一、二年のうちには必修科目も多いし、レポートもガンガン出すって宣言されてるんだから」

「そんな夢のないこと言うなよ。女の子のいるキャンパスで、楽しい楽しい大学生活を夢見てがんばってきたのに」

「厳しい法学部で、剣道部に入って、バイトもして、そのうえ在学中に司法試験に挑戦しようと思ってるなら、あまり浮かれてる時間はない気がする……」

「ああ〜浮かれ気分が潰されていく……」

嘆く内田に、龍一が笑いながら言う。

「大丈夫、時間配分なんてなんとかなるもんだ。楽しもうとすれば、ちゃんと楽しめるぞ」

「先輩は頭もいいからなあ。俺たち凡人は、すっごいがんばって勉強しなきゃいけないですよ」

「大学の試験は部に伝わる想定問題集でそれなりの点数が取れるが…司法試験は努力あるのみだからな。暗記しなきゃいけないものの量の多さには目眩がする」

「先輩でもですか？ うーっ」

頭を抱えて唸る内田の横で、丸川が眉間に皺を寄せている。

「俺は司法試験に受かる必要はないから、ひたすら成績を上げる方向に力を入れようかな。そっちのほうが楽だ」

「う、裏切者〜。お前も苦労しろ」

「嫌だね。俺は楽しめるところは楽しみたい」

「野間は？ 野間は、司法試験、受けるだろう？」

「その予定はないけど。法律関係の仕事に就くつもりはないから」

「なんでだよー。お前ら法学部に入ったからには、司法試験合格を目指せ」

「不特定多数の人間を相手にする仕事って、ちょっと……。それに依頼者はみんな、何かしらのトラブルを抱えているわけだし。自分がトラブル解決に向いているとは思えないんだよな」

「あー…野間は細っこいし、綺麗な顔をしてるから、舐められやすそうだな。確かに向いてないか

も」

「複雑……」

あっさり納得されるのも嬉しくない、玲史は顔をしかめる。

そんなふうには四人で話をしているとあっという間に時間が過ぎていき、丸川が壁時計を見て慌てる。

「おっと、ヤバい。もう昼休みが終わるぞ。教科書を取って、講義室に行かないと」

「あ、本当だ。じゃあ、先輩、失礼します」

「ああ。がんばれよ〜」

「龍一さんは？」

「俺は、三限はないんだ。図書館に行って、本でも読んでる」

「それじゃ、あとで」

用事が入っていないかぎり、夕食は玲史のところで一緒に作ることにしている。だから玲史はそう言って龍一と別れた。

その日の講義が終わった後、玲史は家に帰ろうとしたのだが、内田と丸川に誘われて剣道部の練習を見学することになった。

敷地の端のほうにある部室棟へと向かい、そこで二人はロッカーから運動着や靴を取り出して更衣室へと向かった。

「剣道は、持ち物が多くて大変なんだよな〜。道着だけでも結構嵩張るのに、竹刀と防具だろ。試合のときとか、マジで大変なんだ」

「道着を着るのは、試合のときだけ？」

「そういうわけじゃないけど、今は新入生が多いからさ。先輩が辞めさせるって言ってただろ？本気でやるつもりもないのに道着を買わせるわけにはいかないし、当分は基礎トレだから運動着でいって話だ」

「ああ、じゃあ、女の子たちが脱落したあとに本格的な練習をするのかな？」

「だろうな。まあ、どのみち基礎トレは必要だけど」

「そうそう。脱落云々は関係なしに、トレーニングは普通にしなきゃいけないんだよ」

二人は運動着に着替え、体育館に行く。

そこにはすでに何人か部員が集まっていて、思い思いに待機していた。

お喋りに花を咲かせる女の子たちや、ストレッチに精を出す部員。慣れた態度と浮かれた様子から、新入生ともともとの部員の違いがはっきりと分かる。

玲史は邪魔にならないよう端に寄り、その側で内田と丸川もストレッチを始めた。

「聞いてたとおり、女の子が多いな」

「華やかだなー。眼福、眼福<T-CODE src="image/heart.png">」

練習の開始時間が近づいてくるにつれて体育館に部員たちが集まってきていたが、一年生の塊はそのほとんどが女の子だった。

「うわー...本当に女の子ばかり」

しかもこれから運動するというのに、バシッと化粧をしている。

バサバサの付けまつげはともかくとして、剣道部に入るのにその綺麗にマニキュアをした長い爪はどうなんだと思う。それで竹刀を握れるのかと聞きたくなくなってしまったほどだ。

そろそろ集合時間になるが、龍一はまだ姿を現していない。

今日は来ないのだろうか、玲史は首を傾げた。

「あの人が来ちゃうと、女の子たちが騒いで收拾がつかなくなるかもしれないからな。去年の失敗を踏まえてらしいぞ」

「大変なんだね」

「まったくなー」

「あの女の子たち、全部龍一さん目当てってということ？」

「いや、いくらなんでも全部ではないはずだ。中には有段者もいるって話だし。それに初心者でも、本当に剣道をやってみたいっていう子はいると思うぞ」

「でも、まあ、大半が佐木先輩目当てなのは確かだな」

「は一...龍一さんって、本当にモテるんだね。確かに、ちょっと見ないような美形だもんなあ」

二人で出かけたときも、何度か女の子に声をかけられていた。それにただ立っているだけでも、周囲の視線の多さは大変なものがあった。

「試合のときとか、マジで格好いいぞ。こう...鬼気迫る迫力でさ。それでもって面を外したらあの顔が出てくるわけだから、そりゃあ黄色い声も飛ぶよな」

「男でも見とれちゃうほどのカッコよさだもんなー。ハーフの美形剣士なんて格好のネタだから、雑誌

やテレビの取材依頼が結構来たらしいんだけど、全部断ったんだってよ。面倒くさいし、うざい女がこれ以上増えたらかなわんって言って」

「もったいないと思うんだけど、実際うざいのが多いのは事実だからなあ」

「先輩、わざとド迫力オーラを出して女の子たちを近寄せないようにしてるんだけど、凶太いやつはそんなの気にしないし。側で見てても大変だな...って同情したくなる時がある」

「うんうん。モテすぎるのも考えものだ。何事もほどほどが一番いいな—とは思いますが、実際、先輩は大変そうだな」

「へえ」

そういえば龍一が姉たちの部屋の留守番役を買って出たのは、女の子たちが勝手に家に押しかけてきて迷惑をかけたからだと言っていた。

あのマンションに入るには暗証番号が必要だし、エントランスには管理人のようなフロントデスクが常駐していて不審な人物が出入りしないようにしている。

居住者には芸能人もいるとのことで、プライバシーには配慮しているが、記者などが入らないように配達人にもきちん確認を取っていた。

「龍一さん、来ないね」

「ああ、女の子たちの化粧がドロドロになった頃に来るってさ。それまで、大学の外をランニングしてるって話だ」

「ホント、大変.....」

玲史が思わず溜め息を漏らすと、「集合一」という声がかかってワラワラと百人くらいが移動する。そして声を上げた人物のもとに、輪を描くようにして集まった。

一年から四年まで学年ごとに別れて、それぞれ点呼を取っていく。

それから主将だと名乗る人物が、新入生たちはまだ仮入部であること、一ヵ月後に正式入部になることを伝える。

最初のうちは基礎トレだから覚悟するようにとも言い、まずは靴を履き替え、校庭をひたすらランニングだ。主将に十周と言われ、新入生たちから悲鳴が上がった。

無理だとか、そんなに走れないと言っているが、上級生たちがモタモタするなど叱って外に追い出す。走りだしたのはいいが、すぐに遅れだす彼女たちに、走れ走れと代わる代わる叱咤して足を止めさせないようにする。

当然彼女たちは十周も走ることはできなかったが、それでも止まっていいと言われたときには全身汗だくで立ってられない状態だった。

それから全員で体育館に戻ってきて飲み物を飲み、呼吸を整えてから腹筋や背筋などのトレーニングに入る。

「腕立て伏せを五十回、腹筋五十回、スクワット五十回だ」

「—っ!？」

主将の言葉に、先ほどより遥かに大きな悲鳴が上がる。

「ぜ、全部、五十回ずつ？」

何それと思ったのは玲史だけではないようで、ランニングだけでへたり込みそうになっている女の子たちは無理無理と抗議の嵐だ。

「ウソでしょう！」

「無理！絶対、無理！」

「お前ら、剣道がやりたいから入部しようと思ったんじゃないのか？基礎体力をつけなくてどうする。無理じゃなくて、やるんだよ。嫌なら辞めろ」

「ひどい！」

「腕立て伏せなんて、十回もやったことないのに！」

「運動部に入ろうっていう人間が、五十回くらいでガタガタぬかすな。やれ！全員、床に伏せて腕立て準備!!」

主将の怒号に、彼女たちは切れるのと渋々従うグループに別れた。

「そんなのできるわけないでしょ！私、辞める！」

「私も！」

自分の入ろうとしている剣道部が名前だけの遊びサークルではないと知った女の子たちが、怒って体育館を飛び出していった。

その数、五人。

本格的なトレーニングに入る前にそれだけの人数が脱落し、次の練習日に今残っている新入生がそのまま集まるとは思えない。

練習日のたびに、どんどん人が減っていくことになりそうだった。

実際、絶対に無理と叫んだのは誇張ではなく、文句を言いながら腕立て伏せを始めた女の子たちの中には、一回もできない子がいた。

先輩たちと経験者らしい一年生は、特に文句を言うでもなくマネージャーの数を数える声に従って腕立て伏せを繰り返している。

さすがに遅れがちになる部員もいるが、一生懸命ついていこうとする子と、さっさと諦めてやっているように見せかける子に分かれていた。

龍一目当てと思われる一年生たちは、そもそも運動をする気が感じられない髪形と服装だ。一応は運動着らしいが、やたらとゴテゴテしている。

最初のうちは腕を伸ばしていたが、体を支えられなくなってしまうと、服が汚れると文句を言いながら床に伏せ、汗で化粧が崩れて大変なことになっていた。

様子を見ていれば、誰が本気で誰が本気じゃないかすぐに分かる。

なんで佐木さんがいないのよとか、こんなことをしたくないと文句を言っている子たちを、龍一が排除したいと言うのも納得だった。

体育館を使用できる日は限られているのに、龍一目当ての女の子たちが群がっているのは満足に練習できないのは明白である。

腕立て伏せが終わって腹筋に移ったが、練習風景を見ているだけというのも手持ち無沙汰なので、玲史はマネージャーたちの手伝いをする。

飲み物の用意をするにも部員数が多いから、大変そうだった。

「ありがとう。野間くんだけ？ ボクは、奈良崎。内田たちの友達なんだよね？ サークルとかまだ決まってるなら、うちのマネージャーをやってくれないかなあ？ マネージャー志望の子たちはたくさんいたんだけど、みんな佐木目当てでね。他の部員たちに平等に接してくれて、ちゃんと仕事もできるマネージャーが必要なんだ。何しろうちの部、三年のボクと四年の三好先輩しかいないから」

「マネージャー……ですか」

高校の三年間、まったくといっていいほど高校生活を送れなかった玲史は、なんらかのサークルに入りたいと思っていた。

しかしサークル紹介でピンときたところはなかったし、趣味らしい趣味もないのでどうしようか迷っていたところだ。

「でもボク、剣道のこと、何も知らないんですけど」

「それは大丈夫。おいおい覚えていけばいいし、分からないことはボクたちが教えるからさ。それにマネージャーの仕事で一番大切なのは、合宿での部員たちの世話なんだ。特に道着の洗濯がね…何しろ、量が量だから」

「はあ……」

「マネージャーって言えば聞こえがいいけど、やることは地味でね。男目当てで爪を伸ばしてるような子は続かないんだよ。野間くんは、家事は得意？」

「はい、わりと。でも、洗濯なんて洗濯機がしてくれるし、誰にでもできるんじゃないか……」

「去年、洗剤を一箱入れようとした子がいてね。こう…箱をひっくり返して、ザーッと。見てたから止められたけど、危うく洗濯機を壊されるところだった……。その他にもマニキュアが剥がれたと文句を言われたり、付け爪が取れるから嫌だと拒否をされたり……。去年は佐木目当ての子も受け入れたから、本当に大変だった……」

「お、お気の毒様です……」

「そんなわけで、去年のマネージャー志望は全滅だったんだよ。今年こそ誰かになってもらわないと困るのに、まともな子は寄りついてくれないし……派手なイケメンっていうのも、迷惑なものだなあ」

重く深い溜め息に、玲史は同情心をそそられる。

どうせ入りたいサークルはなかったし、龍一だけでなく内田や丸川もいる剣道部は楽しそうだった。

「ええっと…ボクでよければ、やってみます」

「本当に？ ありがとう！ じゃあ、早速入部届けを出してもらわないと」

善は急げとばかりに奈良崎は入部届けを持ってきて、すぐに書けとペンを渡す。

学部や名前などを書いていると、肩で息をした龍一が体育館の中に入ってきて手元を覗き込んだ。

「おっ、入部届けを書いているのか」

「野間くんがね、マネージャーになってくれるって。いや～、本当に助かるよ。お前のせいで、真面目な子は近寄ってくれなくなっちゃったからな」

「俺が悪いんじゃないけど、すみません。でも、玲史ならちゃんとやってくれますよ。なんといっても、俺の家事の先生ですからね」

「あれ？ 知り合い？」

「俺のお隣さんです。料理から掃除、洗濯まで教わってます。セーターって、洗濯機で洗うと縮むんですよ。知ってました？」

「普通に知ってる。でも、そうか…いい子を連れてきてもらったなー」

龍一が姿を現すと色めきたった女の子が腹筋をやめて近づこうとしたが、主将に一喝されて涙目になる。

野太い声には迫力があり、体育館の中がビリビリと震える感じだから無理もない。

「まだ結構いますね」

「ランニングを終えて、腕立てなんかを五十回ずつって言った段階で五人辞めたよ。仮入部期間の一カ月で、やる気のない子たちが全員辞めてくれると嬉しいんだけど」

「毎回この調子でやれば、大丈夫じゃないですか？ 去年もそれで一掃したし。ああ、あと、防具をつけさせるっていう手がありましたっけ」

「臭いからなー、あれ。毎回、ちゃんと手入れはしてるんだけどね」

個人のものはまだしも、部で所有している防具は年季が入っていて、多くの部員たちの汗を吸っているからなんともいえない臭さらしい。

隣で念入りなストレッチをしている龍一に、玲史は聞く。

「そういえば龍一さんは、全国でも優勝を狙えるレベルとか」

「狙えるって言っても、優勝は難しいな。一つ上にすごい人がいて、実力差がはっきりしてるから。よほど調子がいいときじゃないと、あの人は倒せない」

「そういうのって、練習でどうにかなるものなんですか？」

「そうだなあ...もちろん練習も重要だが、その前に覚悟とか本気さが必要な気がする。俺も昔は剣道で食っていくかもしれないと思ったことがあるが、途中から弁護士志望になったからな」

「それは、どうして？」

「うーん...うちの母親のじいさん...俺にとっての曾祖父が剣道の師範でさ。俺は、その人に教わっていたわけだ。居合いもするすごいじいさんでな。そのじいさんが死んで、俺は師事する人を失ったんだよ。あの人がもう五年長生きしてたら、俺の人生も違ってたかもな」

「それに対して、後悔はないんですか？」

「いや。自分で選んだ道だし。道場を継いだ人も尊敬できる剣士ではあったんだが、やはり曾祖父のようには見られないだろ。本気で剣の道を究めたいなら俺なりに努力したはずだから、あそこでもういいと思ったんなら、それまでなんだよ」

「.....」

そんなふうになんか打ち込んだことのない玲史にとっては、想像するしかない心境である。

「もう道場には行ってないんですか？」

「いや、たまに稽古をつけてもらいに行ってる。本気ではあるが、でも、人生を賭けてるっていうわけじゃないから、あっちもそういう感じだな。一年上の彼はまさに人生を賭けて剣道に打ち込んでいて、その差は大きい」

「でも、調子が良ければ勝てる？」

「ああ。たまに...本当にたまにだが、周りの音が聞こえなくなるほど集中できるときがある。相手しか見えずに、頭の中が空っぽになるんだ。そういうときは、誰にも負ける気がしないな」

「へえ.....」

テレビか何かでそんな話を聞いた覚えがあるが、本当にそんな状態になることがあるのかと玲史は感心する。

けれど、そのときの龍一の姿は美しいだろうと思う。

剣道の知識はほとんどないが、マネージャーになった以上はいつか見られるかもしれないと楽しみにした。

<t-pb valign="top">

★★★

同じ部に入れば当然帰り時間も同じで、玲史は剣道部の活動がある週に二回、龍一と一緒に帰ることになった。

その他の日は直帰したり、たまに内田や丸川と遊んで帰ったりもする。

玲史の大学生活は極めて順調で、とても楽しいものだった。

龍一の家事レベルも着実に上がってきている。毎日のように玲史のところで夕食をともし、手伝いもさせているため、最近では出汁の取り方もうまくなってきた。

他の女の子たちが断りまくられた剣道部のマネージャーに就いたことをずるいと言われ、龍一に目をかけてもらっていることで女の子たちのやっかみを多少は受けたが、学年の違う龍一と大学内で一緒にいる機会はそう多くないから大丈夫だった。

先輩マネージャーたちが、「佐木目当てのマネージャーはいらない。っていうか、男しか受け付けられないから」ときっぱり言ってくれたことでなんとか不満が収まった状態だ。

それに奈良崎が言ったとおり、マネージャーの仕事は地味である。

基礎トレのためのカウントや声かけ、飲み物の準備。個人用はそれほどでもないそうだが、部所有の防具は汗臭さが染みついている運ぶだけでも顔をしかめてしまう。

トレーニングについてブーブー文句を言いながら辞めずにいた女の子たちも、これを頭から被せられた

ときには悲鳴を上げて臭いと連発していた。

これが決定打となり、活動のたびにごっそりと一年生の姿が減っていく。本入部を決める一カ月後には、一年生で残っているのは二十三人だった。

けれど、そのぶん残ったのはちゃんと剣道をしてみたいと考えている子たちなので問題ない。最初は龍一目当てで、今も恋心を隠そうともしなかったりするが、龍一はまるで取り合わなかった。

部活動と関係のない発言には見事なスルー能力を発揮し、積極的に迫られても一部員としてしか扱わなかった。

—そんなふうに大学生活が落ち着いてきたとき、玲史への嫌がらせが始まった。

一番最初はロッカーに「バカ」と悪戯書きをされた。

すぐに連絡を受けた大学の職員が飛んできて消してくれたが、それから何度か同じことが繰り返された他に、すれ違いざまに「根暗」と言われた。

言ったのは男だったが、驚いて振り返ったときには早足で立ち去るところだったために後ろ姿しか見えず、追いかけることもしなかったのが誰が言ったのかは分からなかった。

内田と丸川も心配し、「誰だよ」と怒ってくれる。

一番可能性が高いのは、玲史がマネージャーになったうえに、龍一と仲がいいことに怒っている女の子たちだ。

「……でも、今言ったの、男だったよな？」

「しかも、もう六月だぞ？嫌がらせをするなら、もっと早くないとおかしくないか？なんで二カ月も経ってからなんだよ」

「うーん？」

「野間、お前、佐木先輩のこと以外で恨まれるような心当たりある？」

「な、ないよっ。基本、大学と家の往復だけなんだから。龍一さんのこと以外は地味だし」

「地味…っていうと、微妙だけど。お前自体も、結構な美形だし。和風美人だから、女受けは悪いけどな」

「ああ…男が剥き卵みたいな肌でどうする、長い睫なんて必要ないんだから自分に寄越せって怒ってたな」

「わ、和風美人？」

何それと、玲史は顔をしかめる。

「今どきちょっと珍しいような、ツヤピカの真っ黒な髪だろ。全然傷んでないよな。それに、印象的な真っ黒な目。なんか普通より黒目が大きくて、ウルウルしてるし」

「性格もいいし、女ならホント好みなんだけどなー。なんでお前、男なんだよ」

「なんでって言われても困る……」

「そりゃ、そうだ。しかし、どうしたもんか…佐木先輩は大学の有名人だから、一緒にいると目をつけられがちなんだよな。二十人だか三十人だかのマネージャー希望の子たちを断っただけに、野間に八つ当たりが向かうのは理解できるんだが…でも、やっぱりなんで二カ月も経ってからなんだ？」

そこが、彼らにとって不可解な点だ。

もっと早く…玲史がマネージャーになりたての頃なら理解できる。状況が状況なだけに、嫌がらせしなくなる女の子たちの気持ちも分かるからだ。

しかし二カ月も経ってすっかり新入生たちも落ち着きが出てきた今となると、なぜだという思いが強かった。

「最近、何かあったっけか？」

「いや、特に何も」

「だよなー。謎だ」

「佐木先輩がまた、どっかの女に告白されて、振ったんじゃないか？で、その矛先が可愛がられてる野間に向かったとか」

「ああ、ありそう。女ってそういう、わけの分からない恨み方をするよな。野間、毎日、先輩が料理を習いに来るんだろう？そのとき、聞いてみるよ」

「分かった」

そんなことを話しながら学食に行って、それぞれ食券を購入する。

玲史が野菜たっぷりのヘルシーランチを受け取ると、ラーメンとカレーのセットを選んだ二人がもっと食えと言った。

「いや、ボク、二人みたいに運動してるわけじゃないし。……でも、今日は練習がないんだから、そのセットはカロリーオーバーな気がする。炭水化物ばかりだよ」

「旨いんだもんよー」

「これくらいなら、許容範囲内だろ。その代わりに、デザート代わりにクリームパンはやめておくか」

「じゃあ俺は、メロンパンをやめてアンパンにする」

メロンパンのカロリーはすごいからな～と丸川が笑うと、ざわめく学食で剣道部の先輩たちが手を振っ

てきた。

「お前ら、こっち、こっち」

「あ、先輩たちだ。こんちはっす」

「お邪魔しまーす」

龍一を含めた先輩たちは三人。彼らはすでに昼食を食べ終え、コーヒーを飲んでいた。

玲史たちは空いている席に座らせてもらって、いただきますと箸を取る。

「あー...ラーメン、旨い」

「ラーメンとカレーは、日本人の国民食だよなー。あ、そういや、佐木先輩、なんかね、最近野間が嫌がらせされているんですよ。今のところ大したことはないんですけど、マネージャーになるのを断わられた女子が佐木先輩に可愛がられている野間に八ツ当たりしてるんじゃないかって思うんですよ。でも、なんで二カ月も経ってから...とそれが不思議で」

「そうそう、十中八九、佐木先輩関係だと思うんですけど...先輩、最近、手ひどく振った女とかいないですか？」

その言葉に、龍一は驚きの声を上げる。

「はー？ いない、いない。一年の告白ラッシュも一段落して、落ち着いたもんだぞ。この二カ月の間というものの、『俺は司法試験の準備で忙しいから、誰とも付き合う気はない、邪魔するな』と言い続けてるしな。おかげでずいぶんおとなしくなってきた」

「いやいや、それだと、応援しますとか言って弁当を作ったり、部屋に押しかけて来るのが湧いて出そうですけど。先輩が家を出たのって、わりと知られてますからねー」

「マンションの入り口は暗証番号を打ち込まないと開かないし、誰かの後ろについて入ったとしても、住人と会話でもしてないかぎりフロントデスクに止められる。お連れ様ですか...ってな。そのあたりのチェックは厳しいんだよ」

「え？ じゃあ、こっそり誰かを連れ込みたいときはどうするんですか？」

「車だな。地下から直接上がれるようになってる。カメラはあるが、俯いていれば顔は映らないし。入り口も、カメラの位置を把握してうまく体で隠せば連れが判別できないように通るのは可能だ。うち、芸能人が住んでいるらしいから、警備とプライバシーの兼ね合いが難しいみたいだな」

「芸能人って、誰が住んでるんですか？」

「会ったことないから、知らん。玲史は何か知ってるか？」

「ええっと...お笑いの誰かを見たことがあるとか、姉に聞いた覚えが.....。誰だったかな？ 二人組で、カタカナのコンビ名で.....」

「それ、ものすごい数、存在するから」

「お笑い、あんまり詳しくないんだよ。見るテレビ番組ってほしい決まってるから、そこに出ない人は全然分からなくて」

「それは分かるけどさ。野間の箱入り息子感って半端ないな」

「そ、そう？」

「ああ。なんか、浮世離れしてる」

「.....」

友人づきあいに関しては三年のブランクがあるから、そのせいかもしれないと玲史は複雑な顔をする。

「玲史の箱入り息子感とはもかくとして、嫌がらせっていうのはなんなんだ。いつから始まった？」

「うーん...本当に、なんでですかねえ。野間がマネージャーになってすぐにも少し嫌味とか文句とかはありましたけど、それほどひどくなかったし.....。ロッカーに悪戯書きなんてありませんでしたよ。どうして急に始まったのか意味が分かりません」

「どんな嫌がらせなんだ？」

「ロッカーにバカとか死ねとか書かれたり、さっきはすれ違いざまに根暗って言いやがりました。早足で逃げたから誰が言ったか分からないんですけど、男だったんですよ」

「男？ 女じゃなくて？」

「だからどうにも納得できなくて。これといった切っかけも思いつかないし、男っていうのがなあ。ホント、なんなんですかね」

「玲史は？ 何か、理由を思いつかないか？ 男に言い寄られて振ったとか」

「は？ いえ、そういうことはありません。誰かと衝突した覚えもないし、ごく普通の大学生活ですよ。マネージャーになったことで文句を言われたのも、最初のうちだけだし」

「うーん...それじゃ、なんでなんだろうな」

「全然、分かりません」

同じ講義を取っている法学部の学生たちとは、普通に仲良くしている。特に避けられることなく挨拶や会話もするし、休講で時間が空いたときには誘い合ってカフェテリアで一緒にレポートをやったりもした。

本当に、ごくごく平凡な学生生活を送っていたのである。

けれど嫌がらせ自体はとても不快ではあるが、さほど実害はない。だから全員、「誰が」よりも「なぜ今？」のほうに首を捻っていた。

<t-pb valign="top">

★★★

嫌がらせは思い出したように繰り返され、玲史の中に少しずつ鬱屈が溜まっていく。

しかし悪戯書きやすれ違いざまの悪口では相手が誰かも分からず、手をこまねいているしかない状態だった。

玲史たち法学部の学生は、三年生や四年生になれば司法試験にチャレンジする可能性がある。それに加えて就職活動もあり、なるべく一、二年生のうちにより多くの単位を取っておきたいと考えていた。

だからみんな、一限目からめいっぱい講義を入れている。

最寄り駅から大学に向かっていて玲史は、後ろから丸川に声をかけられる。

「野間！ おはよーさん」

タッタッタと軽快に走って隣に来て、レポートは終わったかと聞いてくる。

「終わらせたよ。さっさと提出しちゃうないといつまでもいじくり回しそうだから、今日、もう出すつもり」

「早いなー。俺、まだ半分だよ。つい、録り溜めたドラマを一気見しちゃってさ。眠い……」

「何時くらいに寝たわけ？」

「んー…気がついたら夜中の二時で、やばいと思って慌ててベッドに入った。居眠りしないように気をつけないなー」

「丸川は、もう篠田教授の講義、減点二つ溜まってなかったっけ？」

「そうそう。だから、やばいんだよ。篠田教授の声って、無性に眠気を誘うんだよなあ」

「午後の講義だからっていうのも、あると思うけど。丸川はお昼ご飯を食べすぎるから、眠くなるんだよ」

「だって、講義途中で腹減ると困るだろ」

「居眠りで減点されるよりいいと思うけど。お菓子とかパンを、常備しておけば？」

「講義中に食ったら、やっぱり減点じゃないか？」

「いや、もちろん休み時間に食べるに決まってるよ。なんで講義中？」

「ああ、そりゃそうか」

食い意地が張りすぎだと笑いながらロッカーに行くと、ロッカーで内田が険しい表情を浮かべて立っている。

玲史は首を傾げながら挨拶をする。

「おはよう」

「おはよー。なんかあったか？」

「あった。見ろよ、これ」

そう言って内田が指したのは、玲史のロッカーである。

「—おっと。嫌がらせが、シャレにならない感じになってきたぞ」

鍵が壊され、扉が開けられている。教科書やノートを入れてあったのだが、中は何も入っていない空っぽの状態だった。

玲史は顔をしかめ、大きな溜め息を漏らす。

「どうしよう…教科書、買い直し？ すごい高かったんだけど」

専門書や、教授たちの著書が教科書だから、一冊一冊の値段がとても高い。二千、三千円は当たり前で、中には一万円以上する本もあるのだ。

それがすべてなくなっていたから、被害額はかなりのものになる。

「ノートもなくなってるから、出てこないとまずい気がする。試験、どうしよう」

「ノートなんて俺たちがコピーを取ってやればいいけど、一つ、ノート提出が義務の教授がいたよな？ あれはさすがにまずいだろ」

「とりあえず、事務局に電話だ。そのあたりの相談にも乗ってもらおう」

ロッカーに何度か悪戯書きをされたことで、三人とも事務局の電話番号を知っている。

内田がポケットからスマホを取り出して、ロッカーがこじ開けられて中のものが盗まれていると連絡した。

すぐに事務員が駆けつけてきて、「ああ、鍵を壊されてるなあ」と呑気なことを言う。

「中のものを盗まれました。教科書とノートしか入れていませんでしたけど」

「現金とか、金目のものは盗られていないんだね？」

「はい」

「それは、よかった。不幸中の幸いだな。キミのロッカーは空いているところに変更するから、今後はそっちを使ってもらおう」

「はい」

「今、空いているのはどこだったかな...あとで調べて、連絡を入れるよ」

「分かりました」

「それじゃ、ボクはこれで。修理の手配をしないと」

「は？ いや、ちょっと待ってくださいよ。それで終わりにするつもりですか？ 犯人探しは？」

内田が苛立った様子でそう言うと、事務員は困惑の表情を浮かべる。

「犯人探しと言われても...警察じゃないんだから、無理だよ」

「だったら、警察に通報すればいいじゃないですか。これって立派な器物破損と窃盗ですよな？」

「そうですよ。何もしないなんて、おかしいでしょう」

ロッカーの鍵を壊しているし、教科書の類だけでも被害額が六、七万円になる窃盗事件だ。

内田と丸川は警察に通報して指紋を取ってもらおうと提案したが、大学側は大げさにしたくないと宥めようとする。

「そうはいつでも、このせいで野間は教科書を買直しですよ？ 俺たち学生にとっては、かなりの高額です。ノートもなくなっているから授業や試験に差し障りが出ますし。それなのに被害者が泣き寝入りしろなんて、おかしい話じゃないですか」

「教科書は、新しいものをこちらが用意するよ。ノートは...教授陣にはこのことを報告して、特別な配慮をお願いする。私たちのほうでも調べてみるから」

「悪戯書きのときからそうおっしやっていますよね。野間が狙われているのは確かなんだから、監視カメラの一つでもつけてくれればいいのに」

「申請はしてて、もうそろそろ許可が下りる頃だと思う。予算は限られているし、途中から割り込むのは大変なんだよ。もうすぐだから」

警察沙汰は勘弁してほしいと拜むように頼まれて、三人は渋々ながら了承する。

何しろロッカー自体は大学のものだし、玲史の盗まれたものも大学が提供してくれるという。

警察をキャンパス内に入れたくないという大学側の気持ちも分かるので、監視カメラを一刻も早く取りつけてもらうということで話は決まった。

しかしこのロッカーの事件を機に、思い出したように行われるすれ違いざまの悪口が、「淫乱」や「セフレ」などの性的なものになってきていて、玲史に戸惑いを与えた。

すぐに人混みに紛れてしまうし、相手の狙いがなんなのか分からなさすぎて、嫌がらせの原因を考えようにもとっかかりがまったくない。

内田と丸川が情報を集めてきてくれたところ、インターネット上にある大学の裏掲示板に玲史のことが書き込まれているとのことだった。

それがどこにあるか二人とも絶対に教えてくれないが、どうも玲史は龍一のセフレということになっているらしい。

もちろん面白おかしく噂話を書き込む場所だから、信じている人間は少ない。

けれど龍一と一緒にいることが多いために必然的に目立ってしまっている玲史の話題は、かなりの頻度で出てくるようだ。

二人は言わないが、その内容がひどいものなのは推測できる。そして、なぜ最近、自分を見る周囲の目がおかしいのか理解できた気がする。

悪意がジリジリと忍び寄り、自分の周りを包囲してくるような閉塞感に、玲史は重い溜め息を漏らした。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>